

東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）

第10回 現地会議 in 岩手 速記録

【実施概要】

タイトル：第10回 現地会議 in 岩手 一課題を把握し、資源を見極める。

日時：2014年8月29日（金）13:00～17:00

会場：ブランニューキタカミ コンベンションホール（岩手県北上市大通り1-10-1）

以下、敬称略

開会

開会の挨拶

鹿野 順一（NPO 法人いわて連携復興センター）

皆さん、こんにちは。忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。いわて連携復興センター代表の鹿野です。JCN東日本大震災支援全国ネットワーク現地会議も本日で10回目を迎えることになりました。

東日本大震災発災から4年目を迎え、最近も広島、丹波、福知山、少し遡れば四国中国地方、九州と、様々な所で災害が起きております。規模の大小にはかかわらず、そこには被災者と呼ばれる方がいて、生活を失うというような状況が繰り返されているという風な状況がある中で、継続してつながりを持って、東日本大震災の被災地に関わりを持っていただいている皆様に、まず御礼を申し上げます。と共に、東日本大震災に支援をいただいたボランティア、NGO、NPOの皆さんが現在広島、丹波等々で活動しているということにも敬意を表したいと思っております。

自分のことであれですけど、正直、広島映像はなかなか見られません。やっぱり時間が遡っちゃって、なかなかちょっと厳しいなところがあるところ、現地で何かしなければという仲間の中も広がっているという風に思っております。自分たちも出来ることを少しでも、という気持ちで、自分たちの復興の過程をその後の被災をされた方々のプラスになればというような形で、現地会議を今後捉えていければいいな、自分たちの被災地での活動を捉えていければいいなという風に思っております。

その中で、この3年も含め経験の中で誰かだけが頑張っているという時期になってきたということで、今回の現地会議のテーマは「マルチステークホルダー・プロセス」というようなこととなります。ご参集の皆さまには、その中身もおわかりの方も重々おいでかと思いますが、本日は2名のその事例発表という形で、具体的な事例が出て参りますので、後半のワークには皆さんに主役になって参加をしていただいといたようなしつらえになっておりますので、本日も最後までどうぞよろしくお願いをします。

佐野 淳（岩手県復興局生活再建課）

皆さんこんにちは。岩手県復興局生活再建課の佐野と申します。第10回のJCN現地会議 in 岩手の開催にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。まず、この度の広島の大水害によってお亡くなりになられた方々、そして被災された方々に、心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。東日本大震災津波の発災から3年5か月が経過いたしました。本日お集まりの皆さまはじめ、県内各地、全国のNPO等の皆さま、企業の皆さまからの温かいご支援、ご協力に対し、この場をお借りして、

改めて御礼申し上げます。

県においては、今年度から平成28年度までの3年間を、本格復興期間と位置付けまして、この期間に県が実施する復興に向けた政策、事業等を具体的に示す第2期の復興実施計画を策定し、現在本格復興に取り組んでいるところでございます。この計画では、本格復興を進めるにあたって、重視すべき視点として、参画、つながり、持続性の3つの視点を掲げまして、次世代を担う若者や女性たちの参画による地域づくり、また多様な主体が連携活動する相乗効果による復興の加速、さらには地域資源の発掘、活用など地域社会の持続性を重視した取り組みを推進していくこととしております。

被災地域での復興まちづくりの進展や、災害公営住宅の建設が進むにつれ、被災者の方々の生活も新たなステージに移行しております。新たな居住環境でのコミュニティの形成をはじめ、様々な課題が新たに出てきているところでございます。

本日の会議のサブタイトルといたしまして「課題を把握し資源を見極める—マルチステークホルダー・プロセスによる復興とは—」という風なタイトルを掲げているとうかがっております。複雑化する地域課題を正確に把握し、多様な主体が連携し課題解決に向け取り組んでいくことが非常に大切なことだろうと考えております。被災者お一人お一人が、安心して心豊かに暮らせる生活環境を実現するために、県民、関係団体、企業、NPO、市町村などあらゆる主体の参画と連携によりまして、被災者の皆さんの生活をきめ細かくサポートして参りたいと考えております。被災地の復興、被災者の生活再建におきまして、引き続き皆さまのご支援、ご協力をお願い申し上げます。ご挨拶といたします。本日はよろしく願いいたします。

開催趣旨説明

中野 圭（JCN地域駐在員岩手）

皆さん、本日はお忙しい中お越しいただきましてありがとうございます。JCN岩手担当の中野と申します。よろしくお願いいたします。まず私のほうから、本日第10回現地会議 in 岩手、この企画に至った背景そして主旨というのを説明したいと思います。まずそもそも、JCN、今日名簿見ると初めてご参加いただくのかなという方も多いので、JCNの説明からしていきたいと思います。

JCNというのは、ネットワーク組織です。東日本大震災により被災した地域を支援しようとする団体のネットワーク組織ということですね。3月31日現在で、798団体の加盟があります。大きく分けると3つ、被災地支援と広域避難者支援、後方支援という形で事業を行っておりまして、この現地会議は被災地支援の一環で行っております。被災地支援というのは岩手、宮城、福島に駐在員というのを配置しておりまして、私が岩手の駐在員という形になります。

やっтерることとしては、ケース検討会議ということで、2か月に1回ずつぐらい、各3県のほうでどういった団体がどういった課題を抱えているのかということ、そのケースを一つ一つ検証しながら課題を洗い出し、解決につなげていくという会議を行っております。今、今年度からJCNレポートということで被災地の課題、状況、その今というものを見える化しようということで、ウェブ、そして紙でレポートとして発行しております。

こちらウェブ版のちょっと見映えになるんですけども、9月頃には紙版としてお届け出来るかなと思っております。今日含め、この現地会議というものを今まで岩手で10回開催して参りました。こちらより多くの県内の支援関係者に集まっていたいてその時々々の課題ですとか、状況というのを共有し、そして今後どういったことが必要になるのかということを考えていくという会議でございます。今回は、課題を把握し、資源を見極めるマルチステークホルダー・プロセスによる復興とはと掲げさせていただきました。震災以前から岩手にある社会課題というのが、元々この地域には色々あったわけですがけれども、そ

れがやっぱり東日本大震災という大きな災害が起きたことで、もっと震災の課題というのがどんどん顕在化して来たと。震災を機に多くの団体というのが立ち上がって、震災対応で色々皆さん頑張ってくられたと思います。

一方、緊急的な課題、もう3年半経過しまして、緊急的な課題というのが収束する中で、震災により、元々あった社会課題というのが加速して来たと。その社会課題の解決に挑まなければいけないというのは、共通認識にあるのかなと考えております。実はここまでは前回の現地会議でもこういった課題、背景というのはご説明させていただきましたが、今回はそこに単独では解決するのが難しいと、なので官民をはじめ多様な主体により連携してその解決にあたっていくことが必要だよなということで、今回のテーマ「マルチステークホルダー・プロセス」といったものを考えていきたいなと思っております。

今日の流れ、最初にマルチステークホルダー・プロセスというのはそもそも何なんだということで、まず講義としてちょっとお話を聞いていただくと。その次に具体的にどういう事例が全国にあるのかというのを、被災地の中の事例、被災地の外の事例として、聞いていきたいと思っております。3番目、ワークショップということで、皆さんで是非このマルチステークホルダー・プロセス、それぞれの地域、これからどういう風にやっていけるのかというところを考えていきたいなという風に思っておりますので、最後のワークショップまでお付き合いいただければと思います。本日、長丁場になります。5時までになりますので、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

テーマ1 理解を深める -マルチステークホルダー・プロセスとは何か？-

田尻 佳史（JCN 代表世話人／認定 NPO 法人日本 NPO センター）

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました、今日はJCNの3人代表がいるのですが、そのうちの1人としてこちらのほうに来させていただきましたJCNの代表をします田尻といいます。よろしくお願いいたします。

震災から3年半がたって、このJCNの会議、3県で毎回しょっちゅうやってるわけですけども、今回 10 回目ですが、初めて本業である日本NPOセンターの立場として話す内容が変わって来たと。実を言うとこんな恰好で今日は失礼なんですけど、3日前から東京の企業の皆さんと一緒に被災地が今どうなっているのか、今中野から話がありましたように、官民連携して、民の中にはNPOだけではなくて、営利非営利合わせて復興に向けて協力し合っているという意味では、現場を見ていただくというのが大切だなということで、おとといからずっと宮城から岩手に向かって、45号線沿いにずっと上がって色々な団体とお会いして現場を見て来たということで、こんな恰好で大変失礼いたします。

今日はまさに本業であるマルチステークホルダー・プロセスとは何かと。簡単に言うと、地域なら地域における利害関係者といいますが、そこで生活する人、働く人、そういう人たちが皆が協力し合って物事を解決していくという手法を、これから日本に広げていかないといけない。特に被災地なんか見ると、これ全国的な話ですが、人が集まっているのは都市部だけ。あとはどンドンどンドン人が流出して行って、そういう地域のことをする人たちが減って来て、それをこれは行政ですか、これはNPOですか、ボランティアグループですか、社協ですか、それぞれがやってたんではもう間に合わない。そういう意味では皆の持ち味を生かした、連携した取り組みというのが必要なんだということなんです。ちょっとそれを、初め20分ほど説明させていただきます。

この民間の取り組みへの期待というのがまず1つ挙がってるんですね。先ほども話にありましたけども、行政というものの、そして個人、今回の東日本では沢山の民間の資金も集まり、かつ民間の人たちも動きましたけれども、阪神淡路の頃まではやはり災害が起きて、行政が救助法に伴った公助といいますか、助けをしていく、避難所を設置し、食事を供給し、ということをやって、自立に向けて、あとは家の片づけとは行政やってくれない。自分で片づけてやっていかないといけない。だからそこには、皆さんのように元気な人は、黙々と家の片づけを出来ますけれども、お年寄りであったり障害をお持ちだっ

たりとか、とてもじゃないけど子どもが小さくてそんなことやってられないなというようなところでは、やっぱりそれを助けようじゃないかということで、民間の取り組みということで企業のボランティアの人であったり、NPOの人が現地に駆け付けて、阪神の時でも10階建てのマンション、エレベーターが止まってしまって、1階に来る給水車から水を上げるだけでも大変。そこへ行って協力しようじゃないかということで、色んなボランティアが出て来て、どんどんそれ以降この共助というものが、すごく重要であると言われるようになってきましたし、今現在被災地以外の地域においても、この共助への期待値っていうのが、すごくあるんだということです。特に、この下の棒を見ていただきますと、黒い所は制度によって実施する。今日、行政の県の皆さん来られてますが、行政の場合は制度がないと、いくら目の前に困っている人、相談を受けても、制度がないということで、対応できないというケースがある。逆に制度の範囲であるからこそ、一律のサービスが皆さんに提供されるということになってます。制度がない所はどうするかというと、これは申し訳ないんだけど、ご自分でやって下さい、もしくは民間のサービスを利用して下さいっていう話。

このちょうど狭間のようなところ、まだ新しい出来事だと。課題だと。制度が追いついていない。でも、いずれ制度になるような、来年から動き出します生活困窮者法という法律、生活困窮という問題は今まで制度がなかったので行政としては、生活保護を出すというようなことしかできなかった。もっと相談に乗ろうとか、色んなことやらないといけないことはわかっているんだけど、制度がない。ということで、今回法律が出来た。法律出来る前は、この民間の取り組みでカバーして来たんです。こういう風に制度の狭間みたいな、ここが非常に皆で取り組んで、これ被災地を見ても一緒だと思うんですね。復興の計画がある。その計画からちょっと逸れたところ、そこにはなかなか法的なサービスがなかなかなかったり、予算がつかない。でもそれで困ってる人がいるよね。今回、仮設住宅の中でも時間が長くなって、ちょっと床がボコボコして来たとか、ちょっと耐久性に問題が出て来た、一部の自治体ではそれを積極的に改修しましょうことで、予算もつけて、やられてるところありますけれど、これ地域によって全然やり方が違う。そうなったら、待ってられないというところはNPOが入って、その改修をお手伝いしようとか、まさに狭間のことだ。という協力をしていこうじゃないかということです。

これが変化だと思って下さい。従来は、社会の課題、被災地の課題みたいなものは行政は行政として実施し、市民団体は市民団体としてバラバラに実施してきた。地域よくなる、地域の課題を何とかしたい、それが最近はこちらにありますように、行政と市民団体が一緒に、協働という形でやりましょう。今回の被災地においても、沢山の協働の取り組みというが出て来ました。今日はちょっと大きな範囲の協働と言ってますから、委託も補助金も、それからお金が出なくてもひとくくりにして協働という風に言いたいと思います、やられてきた、未だにNPOと一緒に。岩手県のホームページに出て、こういう事業をやりましょうからNPO応募して下さいねというのをやられてる。ただ、その1対1ではなかなか解決できない問題がある。それをもう少し皆に参加してもらってスタイルを取って解決していきましょう。これが複数による協働、これが今日の主題であるマルチステークホルダー・プロセスというものなんです。行政も行政の出来る範囲のここまでやります。その行政の出来ないところは、NPOはここまでやりましょう。でも、NPOも十分お金持ってない。企業は資金出してお手伝いしましょう。地域課題のことだから、自治会の会長さんにも参加してもらおう。というような色んな知恵と資源を出し合って解決していくっていうのが、これから求められる形かなあという風に思っています。

まさに、マルチステークホルダー・プロセスとはということで、前々からこういう形とは言われていたんですけど、日本にはなかったんですね。そういう呼び名もなかった。そこで今から7年ほど前に内閣府において、こういう新たな利組み、手法として、社会的責任に関する円卓会議という会議を立ち上げたんですね。こういうマルチステークホルダー・プロセスのやり方、手法というものを考えよう。そして実際にやってみようということで始まりました。これは前回の自民党の時代に議論したんですね。ちょっと小さいんで見えませんから説明しますと、いくつか周りに〇があります。例えば、事業団体としては、今日も来られてますが、経団連とか、商工会とか、同友会とか、それからもうこれは国の単位なんでちょっと大きいです。それから消費者団体、市民の生活者という部分でいうとその声を入れましょう。それから労働組合。そして日本ではなか

なかそういう分け方はしないんですが、海外、ヨーロッパのしくみを持って来ると金融セクター。そして、NPO、NGO、そして政府、専門家と。この7つのステークホルダーにのって、問題解決をしていく取り組みを考えようじゃないかと。それぞれの特性、それぞれの持ち味を出しあった共同の取り組みをしようじゃないかということで、スタートしました。その具体的な事例は後ほど大野さんからお話をいただきますけれども、そのモデルを茨城県でやっていただいたということもありますけども。その中で、それぞれがこういう問題を皆で解決したい、こういうことを皆でやったらいいんじゃないかというような、まず、テーマを出し合うところから始まります。ですから、すごく時間掛かるんですね。労働界がこういうのやろうと言ったら、いや、経済界のほう、事業団がいよいよその問題は他の所が議論してるからいいんだという議論になったり、NPOはこういうけどもそれはなかなか労働界としてはのれないとかというようなことの議論を重ねながら、4つの柱でもって議論してきた。スタートしよう。そうすると、いきなり政権が代わってしまったんですね。

そうすると民主党の政権になりますと、どこでもそうですが、前政権の政党が実施していたものが、ことごとくやめていく。新たなやり方をするということで、この、実は円卓会議ももう終わりになりかけたんです。やはりこういう多様な人が集まるしくみというのは、政権が代わってもこれからの社会地域に必要なということで、民主党政権でも同じ仕組みを残したんです。そして、具体的なプログラムというのがその4つが走りました。1つは地域でこういう円卓会議を進めていきましょう。もう1つは市民教育といいますか、消費者教育といいますか、そういうことを皆で取り組んでいきましょう。例えば金融セクターなんかは、お金の使い方という学校でそういう授業をしていたり、NPO、NGOはもちろん日頃から色んな研修をやってる。いや、企業だってできます。こういう研修をやってますよ。消費者団体はもちろん消費者教育をやってますよ。それを皆集めてやっていく。ような2つ。1つは外国、グローバルで環境の問題、大気の問題、色んな問題が起きてる。それを日本でも各セクターがやっていこうなしくみを作りましょうというのが3つめ。そしてあとは、多文化という部分での推進の方針を作ろうじゃないかというこの4つを2年間かけて走りました。その事業をやる時に、茨城でも実際に地域円卓会議という名前で色んなステークホルダーが集まってその地域の課題というのを、何があるのかという洗い出し、そして何が出来るのか、具体的に進めてみよう。ちょっとここまですべてやめておきます。大野さんが喋ることを取ってしまいますんで。是非それは非常に面白い。ただ大変なんだけれども、非常に新たなチャレンジが出来てきたんだということですね。

この円卓会議の効果、どういものがあつたのか。1団体では出来ないことを、複数の団体で取り組むことによってエリアが広がったり、多くの人が集まったりというような色々な効果。1団体では出来ないですね。次、人の動きを変える(市場をつくる)きっかけとなる。今までは、これは役所がやってくれるだろう。これはお節介なNPOがやってくれよと。非常に依存してたものもいやいや自分の地域のことをやってくれてるんだから、自分の出来る範囲をやりましょうというような多様な動きを作り出して来た。企業さんも地域で仕事されている企業さんなんかは、その地域がなくなると、ご商売もやれなくなる。そういう意味では地域の持続性が企業の持続性にもつながって来る。そういう気づきのきっかけをこのマルチステークホルダーの議論の中で出てくることによって、人の動きを変えて来た。それから事業課題を解決するために力が集まる。やっぱり後で模擬をやるみたいですけど、やってみたらその場の中に入ると、何か言わないと、黙って座ってるわけにはいかないんですね。そうすると一生懸命知恵を絞ったり、自分の持っている色んな経験値を前に、皆に提供したりと。そういうことが出てくることによって、それ面白いから一緒にやってみましょうとか、そういうやり方をNPOはやってるんですかと。それ面白いですね。今までの企業の考えとは違いますね。行政の考えとは違いますね。やってみましょう。そういう違いを知る機会にもなってる。それから相乗効果を狙っての、共同のキャンペーンが出来る。先ほど申しましたように、消費者団体は消費者教育ということには非常に熱心なんです。でも消費者教育って何かと考えると、我々が生活者の生活学習なんですね。そうなってくるとNPO、NGOのやっている研修なんかも全く一緒。一緒に研修会をやりましょうよと。NPOでボランティアに働く人も、仕事する人も、皆消費者じゃないと。一緒にやろうよというようなことに対してPRをする。実際にこれは今年また動かしてます。

消費者団体だけが集まってる全国大会、全国8か所で行うヤツに対して、NPOが参加したり、企業の人に参加するっていうのは、今回初めて実験的にやる。そうすると全然、企業と消費者団体ってすごい対立関係にあるんですけど、そういう場面では一緒にやれるわけです。そういうような共同のキャンペーンが出来る。先ほどから言ってますけど、議論が大変。色んな考え方、やり方が違いますから。議論がどこに行くか不安だが、様々立場、実践が融合する中で、想定外の化学反応が生まれる。異質な人とやればやるほど、そこで出来あがったものというのは新たなものが多いんです。同質でやると発想も、やり方も似てますから、ちょっとは変わるかもしれませんが、大きな変化はない。そういう意味では、セクターを超えた、それがプロセス。このプロセス自身が、やっと出来たことにより、このプロセス自身がこの円卓会議の醍醐味になってる。そして2つめ。地域での円卓会議をどうやって仕掛けるか。これは後ほど皆さんにもやっていただきますが、大きく分けて2つあるのかなと。1つ、事業テーマ。地域課題があり、それにかかわりそうなキーパーソンの集まってもらう。例えば先ほどもお話をしたように、仮設住宅、どうもこのままいくと公営住宅、復興公営住宅に移るのに2年ぐらいかかりそう。ちょっともたないぞと、これは。でも、自分の団体だけでは大工のノウハウもなければ、ダメだ、幾つかのそういうことにかかわっている、もしくは能力を持っている企業さんをお願いして、こっちでNPOにもやってみようという風に、同じ課題を考える団体が集まるという方法があります。これは共有しやすいですから、スタートは早いです。ただ、どうも自分の出来ることだけで終わる可能性もあるかなと。

2つめ。多様なメンバーに集まってもらい、そのメンバーで協働できる事業を考えて組み立てる後ほど事例に出てる茨城県はこの方式をとりました。何が課題だろう。人口流失してるよ、いや子育て支援も大変なんだ、いやいや農業も大変だぞと。担えていないよと。いやいやそれどころか、買い物に行けませんよと。そういう地域の課題出して、どれが優先するかなという議論をし、その優先する順位を付けた後に、それを我々として何が出来る？という議論が始まる。すごく時間がかかります。すごく時間がかかりますが、非常に大きな学習の機会、地域の知らなかった課題を知ったり、それにこういう団体はそういう課題にかかわってたんだなというのに気付く。そういう意味では非常にいいパターン。これどちらでも構わないですけど、皆さんに合う形でやってもらってもいいかなという風に思います。これで終わりですね。

はい、ということで、ざっとマルチステークホルダー・プロセスとは何かというお話をしましたけれども、とりあえず、異質なセクター間が集まる。これも、人は色々です。二者よりは三者、三者より四者、五者という風に多様な関係者をきっちと集めて、1つの課題に向き合って取り組みをしていくという、今どうでしょう、被災地見ていて。最近私も、色んな団体に行かせていただいたり、地域に行くとNOPの人とお話をすると、あ、実はどここの団体と今一緒にこういう事業をやってるんですと。南三陸に行きますと、新しい事業作り、雇用づくりということで、以前、昔々には、漁業だけではなくて、林業やっていたり、羊を飼って、羊毛を使って服を作ったりというようなことが地域にあったんです。それを何とか復興しようということで羊を飼い出した団体があります。その羊毛に目を付けた、子育て中のお母さんの仕事づくりを考えている人が、その羊毛を我々に仕事にさしてくれませんかということで、今、共働でそういうことをやってる。一緒にやり始めるというのが、だいぶ広がって来たなという風に思うんですけど。まだまだこれから、長くかかっていきます。

1団体で、ずっとあと2年、3年、4年、復興あと5年で出来るのか10年で出来るか、まだまだ先が見えない部分を、自分たちだけでやり続けようというのはかなり重荷。そう言う意味では、今から色んな形で、この事業はあの団体とあの団体とあの団体でやろう、こういう事業はこの団体とやろう、ここは企業さんとじゃなくて行政とやろう。そういう色んなパートナーをもって進めていって、少しでも自分たちの団体だけが担っていくということではない形にしていく必要がある時期にきてるんじゃないかなということで、今日こういうテーマを選ばせていただきました。今ちょっと私の言葉足らずの部分があるかと思いますが、この後はおふたつの事例を聞いて実際に被災地でもこういう取り組みを、子どもためにこういうことをやろうよということでやられた実践例も含めて、お話し聞いていただければもう少しすんなり落ちるのかなと思いますので、引き続き、ご参加よろしく願いいたします。ではこれで、初めの話は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

テーマ2 事例を知る -地域課題への取り組み事例を知る-

田尻

はい、引き続きまして、見苦しい姿を見ていただきますが、あの東さん、それから大野さん、よろしくお願いします。初めに皆さんに謝っておきますけども、非常にジェンダーバランスの悪い配置で申し訳ございません。もう沢山の事例にしちゃうと、それだけ話だけで時間が食うので、この後皆さんにも体験していただくということで、ちょっと少なめにするとこういことになってしまいましたが、意図はございませんのでお許し下さい。それでは、今私が話をしました通り、そのマルチステークホルダー・プロセス、もしくは円卓会議とは何なのということについて、これは本当の事例をお聞きすると、あ、そういうことかと、それならうちもやったことあるよと、それに近いことやったよというのが、すごくわかっていただけるんじゃないかなという風に思っております。

これで、この後東さんのほうにお話をいただきますけど、ちょっと今日のパネルディスカッションはやり方が変わってます。事例をいただいた後、皆さんがそれ聞いてどう思ったかみたいなことをちょっと会場の中でもお話をしてもらい、その中から出て来た質問に答えていただいて、そして次に大野さんの事例を聞いていただいて、またそういうディスカッションをやっていただくというような形で、出来るだけ参加型で進めて行きたいという風に思っていますので、よろしくお願いします。その進行自身は、専門家が来てますので、後ほどご紹介したいと思います。ここから早速でございますが、東さんのほうにお話をいただきたいと、これですかテーマは「予算ゼロからの釜石あそび場マップ制作について」流行ってますからね、今、ゼロ円というのがね。ゼロでやったというところのお話をお聞きしたいと思います。よろしくお願いいたします。

東 洋平（認定 NPO 法人国境なき子どもたち 岩手事務所）

国境のなき子どもたちの東と申します。どうぞ今日はよろしくお願いいたします。

今日の流れとしましては、まずマップ作成に至る背景、どういった問題が今、被災地で起きているか、2番、子どもたちへの影響。そういった背景が、子どもたちにどういった風な影響を及ぼしているか、そして実際…ありがとうございます。3番マップを作る上での過程について。4番その過程の中でどういった問題であったり、どういった改善点が考えられたか。そちら、流れに沿って説明させていただきます。

マップ制作に至る背景ですが、皆さんもご存知の通り、震災後色々な影響が起きております。震災後子どもたちの遊び場の減少というの、その1つだと思います。1つとしてまず、震災により、本来子どもたちの遊び場となるべき校庭だったり公園自体が被災して使えなくなってしまっています。2つめに、仮設住宅の建設の影響。こちらは、幸いにも震災をまぬがれた公園や校庭が幾つか残っておりますが、そちらの大きな土地にはだいたい仮設住宅が建っております。この仮設住宅も、大人目線で造られておりますので、子どもたちが遊んだり、居場所としてはやはり、あまりいい所ではないと思います。子どもたちもやはり仮設の中で、通路であったり駐車場とかスペースを見つけて遊ぶんですが、大人たちから「そこは危ないからあっちへ行け」とか「うるさいからあっちへ行け」とか言われてしまって、子どもたちの居場所が本当になくなっていきます。その次、仮設住宅入居に伴う移転の影響ですが、こちらは住み慣れた地域から仮設住宅に入るために、全く知らない地域に移らなければいけなかった子どもたちもいます。移った先での学校に通うんですが、そちらの学校にやはり馴染めず元の学校に戻る子も出てきています。そういった子どもたちがどうしても放課後、自分たちの友人と遊びたくても離れた地域に移ってしまうことで、距離が離れてしまい遊ぶことが出来なくなるとか、遊び場に関する情報の不足ですけれども、全く住んだことがない地域に移ってしまって、自分達の身の回りにどういった遊び場があるとか、公園があるとか、そういった情報が手に入れることができず、子どもたちが遊べない、そういった状況になっております。

遊び場の不足がどういう風な影響を、子どもたちに影響を及ぼしているかなんですが、こちら複合的な要因があって、一概には言えないですけども、大きく分けて2つの影響が出てくるかと思えます。1つめが身体的な影響です。こちら運動能力の低下についてなんですが、被災地の小中学校、全国スポーツテストというものが行われておりますけれども、こちらの数値が全国に比べて1割から2割程度下がっています。また、子どもたちの運動神経の発達についてなんですけれども、だいたい12歳くらいまででその運動神経のしくみというのは完成されると言われております。12歳以後に、その運動神経の発達を促すような運動をしてもそれはあまり育たないという話を聞いています。なので、12歳までは、筋力トレーニングとか、単純な反復運動を繰り返すものよりは、複雑な運動、ジャンプであったり、走ったり、立ち止まったり、右に行くと見せかけて左に行くとか、そういった複雑な運動が必要だと言われております。それは、本当に鬼ごっこであったり、スポーツでもそうですが、そういったもので培われるものだと言われております。それが12歳以後の成長してしきった後に、頑張っただけで育てようとしてもそれは育たず、それは取り戻そうとしてもどうにも12歳後には取り戻せないものだと言われております。次に精神的な影響ですが、こちらストレスの発散の場の減少は、皆さんが想像できるかと思うんですが、次の社会的環境を学ぶ機会の減少について、子ども達は遊びを通してコミュニケーションであったり、社会的環境を学ぶと言われております。子ども達は本当に自由に自分たちのルールを持って遊びを行うと思うんですけども、しかしそのルールを作ってもそれが自分に優位過ぎていたり、場を壊すようなルールを作ってしまうと、遊びが成り立たない。そういったことを遊びの中で覚えていきます。そういった学ぶ機会が今すごく減少しております。これが3年半でこれだけの影響が出ているので、もしこれが5年だったり10年たつような状況になってしまうと、こういった影響が出るかちょっとわからず、すごく危惧しております。

マップの制作過程についてですが、こちら2012年に釜石市主催の子ども支援ネットワーク会議というものがございました。この中で先ほど述べたような問題が発表されており、それについて懸念した子ども支援団体の有志が集まり、こういったことが出来るだろうと話を始めたんです。そこには釜石市の子ども課さんも参加しております。色々話し合っていく中で、こういった課題が見えてきたかと言えば、保護者の方たちから、遊ぶ場所であったり公園がないという声を聞いてたんですね。しかし半面、車で例えば市内とかを走ってみると、公園はまだ点々と残っているようなんです。ここで仮説をたてたんですが、住み慣れていた地域から全然知らない地域に移ることで、周りの状況を全く知らない、もしくは公園等そういったものは、普段身の回りにあるものであって、今まで気にとめていなかった、そういった状況があると思います。そういった情報の偏りを解消するために、何か一目でわかるようなこういったマップを作ればいいのか、そういったことからこの釜石あそび場マップを作成いたしました。こちらマップの作成委員会の中に、色んな団体があるかと思うんですが、こういった団体が集まって自分たちの長所を生かして、何が出来るかそういったものを考えていっております。釜石市子ども課であれば、行政ならではの情報であったり、あとは三陸ひとつなぎ自然学校さんは地域に根差した団体ですので、地域に根差した情報とか、あとはセーブ・ザ・チルドレンさんであれば、広範囲での活動を行っておりますので、他での地域の事例であったり、そういうものを持ち寄って話を進めていきました。しかし、我々も支援団体だっただけでこういったマップ作りのプロではありません。進めていく中でも、どうしても行き詰ってしまうところがあります。そこで、企業さんとか専門家の方たちに、アドバイスをお願いすることになりました。こちら各団体につながりがある、企業であったり、専門家の方たち、ご協力いただいた方たち、こういった方たちとのつながりを生かして、何とか形にしております。この田中ちとせさんであれば、東京のプロのデザイナーの方なんですが、他の地域の団体の紹介で、このデザインをお願いしております。あとゼロックスさんや大塚商会さんであれば、JPFさんやいわて未来づくり機構さん、中間支援のつながりを生かして、こうした企業の方たちを紹介いただいております。このお願いする時も、ただマップを作って欲しいではなくて、我々の趣旨であったり、目的を明確にして、具体的に我々がお願いしたいことは何であるか、協力いただけることは何であるか、そういったものを具体化してご協力いただいております。結果として、予算ゼロにもかかわらず、こちらのマップ5千枚を作ることができました。こちら釜石市内の小中学校、あと幼稚園、保育所、子育て関係の施設にお配りしております。また釜石市の子ども課さんのホームページでもダウンロードが出

来ます。反応ですが、親御さんから釜石市にこんなに公園があるとは知らなかった、ほかあとは仮設住宅の中で子どもと2人きりでいつもふさぎ込みがちになっていたのが、自分の身近にこういう風な気軽に行ける場所があつてすごく助かるとか、当初予想はしていなかったんですけども、震災関連で釜石市に初めて来た方、そういった家庭の方たちが、初めて来たので全く情報がない中で、こういったマップがあつて、自分たちが行くことが出来る場所がわかったとか、そういった声をいただいております。

マップ作りの中で、課題と改善点です。こちら我々、普段何か事業を行う時に、主催の団体があつて、そこに後援であつたり協賛という形で普通はつくとは思うんですけども、我々は今回、この委員会は並列対等な関係でこのマップ作りを行いました。並列対等な関係についてのメリットですが、負担の分担と責任の軽減があると思います。主催団体がある場合は、その主催団体のすべて負担になってしまうかと思うんですが、我々は今回並列同等な関係でいることで、各団体が子どもの遊び場不足という、当事者の問題に対して我々自分達は当事者である、当事者として解決しなければいけない、そういった気持ちで臨んでおりましたので、その分負担を分散することができ、また責任を軽減することができたと思っております。また、各団体がその問題に対して、自分達が当事者でそれを解決しなければいけない、そういったモチベーションの増加にもつながっていると思います。そしてデメリットですが、こちらまず費用の問題ですね。我々、色々な団体が集まったはいんですけども、何か特別な法人格を持つてるわけではないです。なので補助金であつたり、あとは助成金を申請しようにも、予算ポケットと言えいいんではないでしょうか、予算の入る会計がありません。ですので我々は、作成に支援を下さるという方もいたんですけども、どうしてもポケットがないために、後々ちよつと最後に述べますが、私の我儘があつて、今回予算ゼロで作ることになりました。次に時間が掛かるということですけども、色々な団体さんがかかわっておりますので、作成委員会でマップ作製がバラバラにならないように、また、同等な関係ですので、どこかが勝手にやるのではなくて、皆の意思統一の下進めたいと思っておりました。そのために、確認や承諾を重視したんですけども、そのせいでどうしても時間が掛かってしまいました。やはり皆、各団体、自分たちの担当する業務があつて、その中でこのマップ作りを行っておりましたので、マップ作成だけにはかかわることができずにそこはすごく時間が掛かってしまい、そこは反省だと思っております。

最後に、田尻さんもおっしゃっていましたが、支援団体が減少する中で、色々な方たちが連携する必要性はすごく高まっていると思います。やはり、震災当初は色々な団体がいて、団体が各自に活動することで、何とか問題をカバーすることが出来ました。しかし今、支援団体がすごく減っている中で、どうしてもカバー出来ない所が増えています。そこで、各団体が長所だけではなくて、例えば行政であつたり、企業であつたり、地域の方たちでもそうです。色々な方たちが自分たちの長所を持ち合うことで支援の幅を広げたり、または手厚い支援が出来るのではないかと考えています。こちら予算ゼロでの作成についてですが、ちよつとこちら、私の我儘もあつたんですけども、私個人の思いで大変恐縮なんですけども、被災地への関心が減っているというのは皆さんお聞き及びのことかと思えます。それは我々支援団体、被災地にいる我々が、被災地ではまだまだ支援が必要ですよという話を声を強めたとしても、この状況は残念ながら大きくは変わらないと思います。そして我々は、ご寄付で成り立っている団体ですので、関心がなくなってしまうと、我々もいつかはその活動をストップして撤退せざるを得なくなってしまうと思います。しかしその時まで、今被災地にある問題が解決されるとはやはり思えなくて、その際に、その問題に対して取り組まなければいけないのは、そこに残っている住民の方たちだと思います。そしてその住民の方たちが問題に取り組む際に、ネックとなるのが我々がやはり直面したような費用であつたりマンパワーであつたり、あとは経験であつたり、そういったものが問題になってくると思います。今回我々は、お金がない中でも、何とか自分たちが知恵をふりしぼったり、あとは自分たちの関係性を生かすことでマップという形に残すことが出来ました。将来、この住民の方たちがもし問題に直面してそれに取り組まなければいけなくなった際に、自分たちにはお金がないから出来ない、やったことがないから無理だ、そういう風に思わずに、以前、お金がない中でもこういった釜石あそび場マップを作った人

たちがいると、もしかすると自分たちにも出来るかもしれない、そういった希望につながってくれればと私は思っております。

以上長くなってしまいましたが、この場をお借りいたしました、協力いただいた皆さんに御礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。ご清聴ありがとうございます。

田尻

東さん、ありがとうございました。尾上さんお願いしていいですかね。

尾上 昌毅（NPO 法人日本ファシリテーション協会）

では今から5分ぐらい時間を差し上げますので、自由に今、東さんのお話を聞いて思ったこととか、感想といったことで結構ですので、今お話を聞いてこんなこと感じたよといったようなことを、3人で自由に話をさせていただけますでしょうか。5分たったところでお知らせいたしますので、それでは、もし準備がよろしければ、始めていただけますでしょうか。大丈夫ですかね。お願いします。

質問者（長沢）

専門家とか企業の皆さんにお願いをされたタイミングというのを伺いたいという風に思います。これ最初の段階のところから、一緒に入って議論をして、課題解決につなげようとしたのか、それとも出来あがって見る段階のところ、ここやって欲しいんだけど、ここやって欲しいんだけどって言って、お願いに行ったのか、どちらかなのかというのをちょっと伺いたいと思います。

田尻

はい、ちょっとだけ東さん、私も同じような質問を重ねていただきたらと思うんですが、このマップ作りね、会議何回もした、結構時間も掛かったよと。これを初めての会議からこれが完成するまでの期間、どれくらい掛かったのかっていうの、だいたいいいですし、どれくらい会議を重ねたのかということと、併せてどのタイミングの会議の時に企業に依頼したり、専門家に依頼したのかというのをちょっと併せて答えていただくとありがたいです。

東

ご質問ありがとうございます。すみません、ちょっと、私のほうでも期間のほうをお答えするのはちょっと抜けていまして、だいたいこれは2012年から作り始めて、2014年の4月に完成しております。ですので、1年半から2年くらい掛かっています。会議は、その時期にもよりますが、だいたい月1回程度行っております。専門家だったり、あとは企業の方たちに参加いただいたタイミングですけれども、我々が集まって色々な情報を共有していく中で、マップを作ろうとしたんですけれども、その中で我々でもある程度の形は考えたんですが、本当にそれをどうやったら形に出来るんだろうか、そういったところで色々なアドバイスをいただく段階で、企業の皆さんに協力をお願いしております。相談しながら、そこで相談して分担できることを整理してそしてお願いするという形になっております。よろしいでしょうか。

田尻

これもうちょっと聞かして。富士ゼロックスさんが実際印刷されたんですか。富士ゼロックスさんも会議に出られてたんですか。会議には出ていない？

東

会議には出てはいないんですけども、お願いするところで色々な相談をしたりとか、そういった形で連絡を取っていました。

田尻

NPOの皆さんで会議をし、こういうものを作ろうねと、我々だけでは作れないので、ちょっと富士ゼロックスさんにも印刷お願いしようじゃないかと。そういうところから富士ゼロックスさんと何回かのやり取りはされているけれども、ということですか。それでよろしいですか。はい。追加の質問がきますよ。ちょっと冷や汗かいていますんで。

質問者（長沢）

すみませんね。逆に田尻さんに質問したいと思います。今みたいに、企業側には何かが決まったところで依頼に行くというのを、マルチステークホルダー・プロセスと呼ばれますか。

田尻

呼ばないですね。はい。やっぱり初めの頃からっていう、でもこれはスタートの段階で、今回は、こういう本当に支援をされている団体の思いを中心になって作って…ここがまず第一歩。で、企業さんがこういったお手伝いいただいたと。多分もうちょっとしたら、もうちょっと細かい地図のヤツも欲しいねとか、第二弾みたいな話の時には、頭からちょっと入ってもらえませんか、というようなやり方も出来ますし、先ほど話をされていた、住民自らっていうところで行くと、少し子ども記者みたいなものも例えばこの中に入れてみようじゃないかとか、そういう第二弾、第三弾の中で少しずつ膨れ上がって行くというような形になっていくと、さらにいいと思うんですけども。今の段階でNPO同士のマルチにはなってるんですけども、もう一歩進めていくということが出来れば。ただ、入り口としては、その集まりがない限り、私は思ってたんですが、これだけの団体が集まってお願いに行ったら多分、企業さんもいいですよって言われたと思う。これ多分、国境なき子どもたち東さんだけが、うちこんなことしたいんですけど多分持って行けると、うまく断られたかもしれない。これは1つのこれも手法なんですけど、スケールメリットみたいなものがあって、多分一緒ですね。JCNなんかでも今、復興庁と定期的に会議をしているんですけど、JCN単体は、田尻単体が行っても多分そういうことは出来ない。というのも先ほど説明があったように800近い団体によって構成されていますよっていう話になると、これちょっと聞いとかなないと、800を切ってしまうっていう風に見えるやう。そういう意味では、このマルチステークホルダー・プロセスの第一歩としては、単体で言うよりこれだけ集まって言われたからこそその効果は、僕はここに出てるかなという風に思いました。

質問者（上村）

上村と申します。1つちょっとNPOの立場からお聞きしたいんですけども、今回共同にかなりお時間掛けたというか、丁寧に2年近くやられたということなんですけれども、それによって例えばマップの第二弾とか、グループによってまた新たな取り組みというところのあれで、構成メンバーの方々には士気とか、またやりたいなという気持ちになっているのかということもちょっとリアルなところでお聞きしたいと。よろしくお願いします。

東

はい、こちら、ご覧いただければわかると思うんですが、こちら釜石市内全域のマップとなっております。第二弾、第三弾の間で出ていたのは、ある細かい特定の地域に絞って、その中でどういった子どもたちならではの遊び場であったり、こうい

った釣り場があるとか、こういった隠れ家みたいなところがあるとか、そういったお話も出ていましたが、ちょっとまだ形には起こせていないです。またこの作成委員会だけではなくて、一緒に作った作成委員会の団体の中でもやはり連携が深まっており、何か活動する際に、一緒に連携して活動することがやはり増えていっていますし、あとは釜石市の子ども課さんも一緒に今回作成したことをきっかけに、やはり関係が密になったというか、そういった効果も出ています。よろしいですか。

上村

ありがとうございます。

質問者（細谷）

SAVEIWATE の細谷と申します。釜石のあそび場マップさんのちょっとだけ、携わらせていただいたというか、少しお話を紹介したいと思ったんですけども。大塚商会さんのほうにご相談させていただいたのが、実は東京の岩手もりおか復興ステーションという、所からご相談させていただいたんですけども、元々大塚商会さん、CSRとか復興支援にすごく協力的だったということもあって、あと用紙というものを製品としてお持ちだったので、ご相談したんですけども、大塚商会さんにとっても、提供して下さった用紙は商品としては使用できないものだったということなので、すごく喜んでご支援のためなら、被災者のためならということで提供して下さったので、そういった意味では大塚商会さんにとってもよかったという感じで、はい、助かりましたし、またそういうことがあるのであれば、ご相談して下さいとおっしゃってましたので。

田尻

ありがとうございます。東さん、いいですね、あんな応援団、ここにいてね。大野さんは茨城から来てますから多分応援団いないと思いますけど、はい、東さんどうもありがとうございました。また後ほども、ご参加いただきますけれども、改めて拍手をお願いいたします。

ちょっと孤立無援の茨城から来た大野さんに、応援団いるかどうか是非キャッチしていただければと思います。よろしく願います。

大野 覚（認定 NPO 法人茨城 NPO センター・コモンズ）

はい、皆さんこんにちは。茨城から参りました茨城 NPO センター・コモンズの大野と申します。ちょっと独りぼっちだと淋しいので、是非応援団になって下さい。コモンズはよく地域にある NPO だけではないんですけども、企業ですとかボランティア団体ですとか、行政も含めて色々な組織の地域活動、社会活動の支援をするという団体です。よくあるセンター、拠点があるというわけでは、まあセンターという名前ついてますけども、事務所はありますけども、そういう支援拠点があるというよりは、自由に県域でゆるやかにといいますか、活動している団体です。本当に今日のはるばる、茨城の田舎のほうからお招きいただきましてありがとうございました。ちょっと次進んでいただきまして、今日私のほうでお話しさせていただきたいなと思ったのは、5点ほどあります。茨城、先ほど田尻さんのほうから地域円卓会議ということをおっしゃっていただきましたけれども、そういったものも含めてこれまでちょっと積み重ねて来た経緯を簡単にご説明します。これまでうちが直接かかわったもしくは間接的にかかわった事例をご紹介させていただきます。それが、タウン・モビリティというものと、学習支援の学びと交流の秘密基地というところを主に包括してお話ししつつ、最後に円卓といいますかマルチステークホルダー・プロセスで、結構コーディネートのコツというか仕方というか、そこで見えて来たコツというのが結構ありますので、それを多少共有出来ればなと思ってます。

これまでの経緯ということなんですけども、茨城だと別紙にまとめてますが、地域円卓会議ということがクローズアップして

いただくんですけども、それまでにちょっと色々色んな組織と一緒に何かやっつけていこうよというのをちょっと作ってきたという素地がありました。元々は、茨城NPOフォーラムということでNPOの見本市みたいなのをNPO法が出来てから、これからは社会はNPOなんだということで、毎年やって来たメンバーがいました。それが、「SRネット」というものにつながっていくんですけども、こちらのオレンジ色のパンフレットの裏のところに連携組織とありまして、このメンバーが茨城ですと円卓といいますが、地域円卓会議、マルチステークホルダー・プロセスを仕掛ける仕掛け人メンバーみたいなのがいます。我々コモンズも含めて、経営者協会さんですとか、新聞社さん、生協のパルシステムですとか、連合ですとか、一応そういうセクター横断した場がありました。そこで毎年そういう風な色々な、ただNPOというよりはだんだんそこから、企業の社会貢献ですとか、企業だけじゃなくて、企業と行政とNPOがどう連携するののかというのを話し合っていくテーマに包括してSRネットというところでやって来て、その流れを受けて、先ほど田尻さんのほうからお話しがあった、中央レベルでの社会的責任に関する円卓会議というのの国バージョンはあったんですけども、もうちょっと地域単位でやらないとなかなか環境の課題があるねと、グローバルだと、温暖化だといっても、なかなかそこでアクションをというのは難しいということもあるので、もうちょっと地域単位でやろうということで、2011年に初めて地域円卓会議というのを茨城でさせていただきました。歴史としてはそういったものがあるので、実は地域円卓会議だけではなくて、そこでSRネットというメンバーがちょっと形を変えつつ、新しい公共フォーラムというものですとか、フューチャーセンターというものでもうちょっと個人も含めた多様な人が集まる場を作るということも、色々やって来たということです。色々名前は変わってますけども、要は地域で皆で課題があるんだしたら、よってたかって皆で協力してやろうよというムーブメントをずっと作って来たということです。

次に、コモンズが仕掛けてるものと、先ほど言ったように間接的にかかわっているものがあるので、ちょっとわかりづらいんですが、整理したものがこちらのA3の横長の表になってます。これはもちろん全部説明してる時間はないので、後で質問なり田尻さんとのやり取りの中で深めていきたいなと思います。この黒いところの部分を今日は主にピックアップしてお話ししたいなと思うんですが、実際に地域円卓会議を茨城でやる前から、進めてきたということで、例えばフードバンクを、食べられるのにまだまだ賞味期限内なのに、包装に傷が入ったということで捨てられてしまうものをうまく食べ物に困っている生活困窮者の方もいらっしゃいますし、福祉施設だって運営に困ってるので、そういったところに届けようよというのを生協さんと我々コモンズと経営者協会さんと色々なメンバーで作って、研究会を作って勉強会をやっているのを作ってきたのがありますし、2番目は地域円卓会議で議論になって、地域で活動している例えば東さんのような団体を応援するしくみを作ろうと。特に資金面で応援していこうという話で、だんだん盛り上がってきまして、それで今、いばらき未来基金というコミュニティファンドというか、市民コミュニティ財団とは言えないですけども、寄付を市民からいただいたものを仲介するというのをやっています。そういった形で、徐々に成果を出しつつあるかなという感じです。

実際に会議を作ったそこで運営して、そこで新たな事業を組み立てるというケースもあれば、例えば5番6番のような外国人の支援ということで、どちらかというとコモンズが中心となりながらも色々なセクターの人に声掛けしてやっていたという、先ほど長沢さんからの質問によるとこれはマルチステークホルダーでは多分ないとは思いますが、要は色々な組織が事業連携して課題を解決していけばいいとは思いますが、そういった流れを作ってきたというのはあります。次に回していただきまして、具体的に何をやってきたか、ちょっとわかりやすく説明したいなと思うのですが、ひとつ、タウンモビリティという取り組みです。皆さん、この言葉聞かれたこと、福祉関係者、社協さんだともしかするとあるかもしれないですが、厳密な意味ではタウンモビリティではないんですけども、発祥はイギリスのほうで電動スクーターですとか、そういったものを使って足腰が弱いおじいちゃんおばあちゃんですとか、障害のある方でも街中を自由に移動出来るよということも、バリアフリーの取り組みの1つです。それを10年以上前にも仕掛けて来たことあるんですけども、ちょっともう一度やり直そうということで、最近始めたものがあります。課題としては書いてありますけれど、低床バスが岩手よりも多分全然進んでないと思うんですけど、全然バリアフリーに、水戸という茨城の県庁所在地がある所はなくなって、非常に街中に段差があったり、障害ある方が車

椅子でなかなか買い物に行きづらかったり、特に街中がひどいものなので、人がなかなか寄りつかなくなっているというのを解消しようよということで、これも元々2011年にあった地域円卓会議での移動の困難者の課題を解決しようという話と発生を組んで続いているものなのですが、行政としては公共交通をどんどん皆さん使ってほしいねという思いもありますし、バス会社はせっかく低床バス、数台はしてるのでそれをどんどん使ってもらいたいというのもあるし、ただやっぱりバスの運転手なんかもなかなかそういったものに慣れてないので、本当に障害者が来るとちょっとドキドキしたりですか、というところもあるんですが、そういう風に色んなステークホルダーが自分分はこれがしたいという思いをそれぞれ出し合ったんですね。

何をやるかといった時に、ちょうど水戸で街中フェスティバルというイベントをやるということになったので、そこで色々な人に来てもらうようなきっかけを作ろうということで、ちょっとイベント的なのですが、外出の機会をということで、バスの情報のサポート、ボランティアの方にやってもらったり、車椅子の貸出というのをやりました。次のページになると写真が幾つかありますけども、車椅子のステーションを作ったりですか、ちょっと落書きバスがありますけれども、子どもたちが落書きをバスに描いたりとか、実際に低床バスの乗車体験をやったり、障害者施設はそこで来てもらって自分達の作業所で作ってるクッキーを販売したりというのをやりました。

もう1つの例ですけども、これは先ほど田尻さんの方からお話があった、来年施行される生活困窮者自立支援法に向けた取り組みの1つですけども、子ども達の学習をどんどん支援して行かないと、それこそ高校受験に失敗したら今ここで職を得るんだというなかなか難しいところがあるので、貧困の連鎖を断つという思いでも、やろうよという話をしました。水戸の中心施設、割りと昔のニュータウン的な、今は結構寂れて来てるような所で、遊休施設があったんですけど、そこを何か活用して出来ないかという話が、一番初めにあって、そこでうちの事務局長は全国色々な事例を見て来た上で、ここで子どもたちの特に一人親世帯の子ども達の支援が出来ないかということで、皆を集めてやったものです。初めに起爆剤として、東京や埼玉の事例をちょっと紹介した上で、これは面白いねということで、大学の先生が乗って来たりとか、いやもう東京でそういったこと出来るんだったら自分たちだってやれるよっていう風に学生さん達も連れて来たので、本気に思ってもらったという所が成功の秘訣だったんですが、最終的には次のページにあるような実際にニュータウンの古びた施設の一角ではありますけども、大学生が主体となって子ども達の学習支援に当たるということをしました。これ、厳密に言うと、どこで貧困家庭かそうじゃないかっていうのを線引きするのは非常に難しいんですけども、そこは難しいので、とりあえず今はせずに、学びと地域の溜まり場づくりということでやりました。次いっていただいて、事例としては、そういったところなんですけども、最後にちょっとだけ茨城で見て来たコツみたいなものをお話したいなと思うんですけども、このスライド、先ほど田尻さんのほうでとられたのと見事にかぶってしまったんで、あまりちょっとお話をしませんけども、パターンとしてはおおまかに分けると2つありまして、1つは事業で集まると。例えば、主体となる事務局というか、中心となるメンバーでここやりたいんだけど皆さんと一緒に協力してもらって新しく作りたい、というパターンと、あとはもうちょっと広く課題ベースで、まだ何をやるか決まってないけれども、その課題について、例えば子どもたちの学習支援ということで何かやりたいね、もしくはかわりそうな組織にまず集まってもらって、何が出来るのかというのを、一緒に考えるっていうパターンがあります。

パターン2のほうですと、ただ呼ばれて参加しましたというところからどれだけ自分も仲間なんだという風に思ってもらえるというのは非常に難しいですし、またはそのメンバーを集める時にもセクターのバランスですか、あまりNPOばかり集まってもなかなかパワーが生まれにくいというケースもありますし、もうちょっと参加者も男ばかり今日の登壇者のように集まっても、もうちょっと女性目線でママさん目線でお話できる人を例えば入れたりですか、あとは年齢のバランスですね。若い人もちょっと入れてちょっとはっちゃけたことを言ってもらえとか、要は街づくりでいう、よそ者、若者、馬鹿者が活躍できるような場にすると盛り上がるかなと。とはいっても、なかなかこの人は入ってないとなかなか議論が進まないというのもあるでしょうから、そこはある程度気を付けなければいけないかなと思います。1つやり方なんですけども、円卓はあまりかつちり決めち

やうと、議論の誘導というか、最終的にはお宅の団体の事業に協力してくれってことになのかい？となっちゃうので、取えてゆるく結論は決めない、落としどころは決めないというのは1つミソです。その中で、自由にフリーディスカッションして、話があっちいたりこっちいたり、先ほどの事例にあったように2年掛かるっていうのもありますし、ただ、そこで議論してて、この会議、話してるんだけどなかなか前に進まないんだけどというもどかしさを感じながらも、でも最終的に到達点が出来るとやっぱり俺ら仲間になったんだという風な一体感が味わえるというのも大きなメリットかなと思います。これが実際に被災地支援の時に大きく役立ったというか、茨城で地域円卓会議というのをやったのが、実は東日本大震災の発災前の1か月前で、その円卓前に田尻さんにも茨城にもお越しいただいて、10回ぐらいずっとこういった会議をやってきて、そのメンバーで熱くなってきたところで、円卓会議成功したね、で、いきなり被災地支援にという形になったので、そこでもう本当に普通であれば例えば企業のしかるべきプロセスを踏んでハンコをいただいてやりますけれども、もう電話1本で、ちょっと車が足りないから被災地支援の救援物資を届けたいからというような形でやれたっていうのは、やっぱり円卓でつながれてきたという関係性を作るっていうのは一番の円卓の魅力かなと思います。

ちょっと時間もあまりないので全部お話出来ないんですが、プロデューサー的視点が非常に大事だと思うんです。別に今日いらっしゃるファシリテーターのことを別に否定するわけではないんですが、ファシリテーション、特に、会議のファシリテーションの能力だけでもやっぱり色々な人が集まっても盛り上がらないというか、その場の関係性としてはいいんですけども、さらにもう一歩仕掛け人としては先を読んで、一歩離れた上で、この議論の展開でも今いるメンバーだとちょっと盛り上がらないから、ちょっと面白い事例をちょっと出してきて、起爆剤で盛り上げようよとか、そういう話の流れを読んだり、こういう風にやるとこの場が一気に燃え上がるんじゃないかなというのを見るのは、非常に大事なかなと思います。次のスライドは長いので、飛ばさせていただきます、最後ですけども、これイメージで作ってますが、円卓って非常にうちの事務局長の横田というのが仕掛けてるんですが、キャンプファイヤーに非常に近いもので、七輪の図をやってますけれども、要は火起こしをする時に着火剤でバツと一気に燃えるタイプと、あとはもうくすぶりながらも徐々に協力してくれるタイプと、色々思うんですが、その火をどうやってうまく起こすのかというのを、プロデューサー的視点で見るとするのは非常に大切なこと、つまりは議論してもなかなか火が・・・という時にもう着火剤で一気にバツと面白い事例を他の地域から持って来て引っ張って、他の地域でもこれやれるんだからうちにも出来るかなという風に思ってもらえるような仕掛けとか、そういう全体を見るコーディネーターというかプロデューサー的な視点が非常に大切なかなと思います。あとは、よく会議ばかりでもアレなので、ちょっと飲みに行ってそこでお酒を酌み交わした時に、新たな発想が出るかもしれないし、そういったところも大切なかなと思います。すみません、話が全然まとまらないのですが、時間をちょっと超過してますので、とりあえず質疑応答に移りたいと思います。ありがとうございました。

田尻

はいどうも、大野さん、ありがとうございました。ちょっと先ほどのように、活性化するとまた質問も出ますので、よろしくお願ひします。

尾上

ではまた、今大野さんのお話を伺って、色々思ったこととか、あると思います。先ほど同じ3人、4人のグループをまたちょっと作っていただいて、思ったこと、感じたこと、感想、場合によっては疑問点がさっきのように出るかもしれませんが、またちょっと恐れ入りますが椅子をちょっとだけ移動していただいて、3人の組を作っていただけますか。時間はまた5分間にしますんで、とりあえずはまずグループを作るところまでお願いします。さっきと同じメンバーで結構です。

はい、どうもありがとうございました。お時間が来ましたので、熱心にお話しありがとうございました。ではまた、前のほうちよっ

と注目いただけますでしょうか。それではまた、ここで田尻さんのほうにバトンをお渡します。

田尻

はい、尾上さんどうもありがとうございます。こちらで見たり、後ろから見たりしてますと、男女がうまく組み合わせさってるところはすごい盛り上がってましたけど、男の人のところだけはむすっとした感じがあって、組み合わせも大切だなという風に思っていましたけど。いかがでしょうか。大野さんへの質問。

大野

なんでも。

田尻

よかったですね。応援団がいましたね。

大野

ありがとうございます。よかった独りぼっちじゃない。

質問者（篠原）

篠原と申します。ちょっと質問なんですけども、幾つものこういうキーワードの中で、取り組んでこられた事例みたいなものをご紹介いただいたんですけども、いきなり円卓会議始める時、何かルールみたいなものというのは、あるのかなという風に思ったんですけども、例えば、特に課題で集まった時に、その課題の要員になるような人たちもやっぱりそこにはいらっしやるわけですよね？例えば、言い方を変えると、行政と市民との関係性が例えば、市民は行政には何かお願いするような関係性がもう従来から築かれていたりだとか、あと行政も、住民の声を聞く場としてそういう場を開催をしているというような、そういうような場であるとなかなか議論が進んでいかないというか、活性化しないと思うんですよね。どこかを責めてしまったりだとかってというようなことがなりかねないと思うんですけども、そういったことに備えてというか、共通のルールだとか、あと実際にそういう方たちを招き入れる時に、共通認識をこの会議はこういうような場ですよというようなことをお伝えをしていることとかがもしあれば、お伺いしたいなという風に思うんですけども、お願いいたします。

大野

、ご質問ありがとうございます。実は、ルールはあるにはあるんですけども、そんなにかっちり入っていただく時に、こういうルールですからとかはそんなにはやってないんですけども、これは別に円卓云々というよりは、おっしゃるように行政と市民と協働をどう進めるかでいつも、例えば、議論になるのは対等性とか、それをどうやるかということなんですけど、よく田尻さんもお説明してましたけど、円卓と行政がやる例えば審議会とか、何が違うのかというと、一番、先ほど東さんのほうからお話があった、対等性というところで誰かにお任せしないと、事務局は最終的にはなんとか計画の策定に全部かかわって、文章書くのは全部行政、みたいな言ったら、市民が言ったのは我々はやります、実行は全部行政です、ではありませんということ、一番初めには言ってます。

つまりは、言ったら、あなたも実際に行動をして下さいという、全部が全部そういう風にはいきませんが、要は誰かにお任せというのをもう壊すという、行政と特に市民の間にある、いったらクレーマー的なそういう関係性みたいなのはもうとっぱらうというのは、もう円卓の一番のミソですから、実際話をしてみると、そういう要望型の人はここには来ないというか、来れな

いというか、いるメンバーは本当にもう実際にそういうことはルールとして明文化しなくても自然とわかってくるというか、言ったんだったらこっちもなんか動かなきゃなということもあるし、そこは相手を巻きこむやり方ですけども、先に事務局なり、これだけ動いて、ていう中で呼んできた場合だと、それだけそっちも動いてるんだったら、私のところにも関係ある課題だし、やらなきゃなという風に思ってもらうようにするとか、巻き込み方の話なんですけども、答えになってるかどうかあれなんですけども、あまりルールとかきっちりはしてないということです。

田尻

はい、ありがとうございます。私から1つ。今の巻き込み方みたいな話があったんですが、先ほど茨城でやられてる、こんなにいつの間にか沢山やってるんだなと思ってたんですが、このマルチステークホルダー・プロセスにおいては、色んなセクターの人に来てもらうというのが、1つミソだと思うんですけど、それはどういう風にして声掛けられるんですか。もちろん、自分の知り合いの中からそれを引っ張り出してくるのか、それとも、このテーマは知り合いにいないよねってなった時に、例えば企業を訪問したりとか、いうこともやられてる？それどういう風に、それ一番難しいなと皆さん思われてると思うんですけど。それもう少し、アイデアというか教えていただければ。

大野

選び方というか、そのポイントというかあれですけど、もちろん事務局という、割りとコモンズが全部言いだしっぺになるケースが多いんですけど、その時はもちろんうちがお声掛けして、例えばさっきの学習支援であれば、元々つながりがあったんですけど、今度こういう子どもたちの動きやりたいんだけど来てくれないかい？という風に、不動産会社の社長さんと呼んだりですとか、というのもあるし、例えば農業の円卓でやった時は、ちょっとこういう話で例えばユニバーサル農業みたいな、精神障害がある方でも別にそうじゃなくても高齢者の方でも、等しく園芸を、もしくは農業を楽しみたいという人にそういう癒しを与えるという風な話の展開になりそうな時に、個別にその会議の中でも終わった後でも、例えば生協さんで、こういう面白い農家さん、取り組みやってるのは知らないか？とか。外国人の時もそうでしたけど、外国人を雇ってる農家さんなり、障害者雇用に積極的にやるところとか企業さんとか知らない？みたいな感じで個別にけしかけてという。

田尻

なるほど。キーパーソンに、色々聞いて、その先をまた紹介してもらっていうことでやっていくと。

大野

もちろん全部コモンズだけだと知らないの、もう色んな人に聞いて面白い人呼んでよってという社交の場に円卓してる。

田尻

わかりました。ありがとうございました。今日来られてる皆さんの中でも、誰にどう声掛けたいか、もしくはあそこに声掛けたいんだけど、誰かのツテがないかなという時に、この岩手県なんかの場合は、まさにこの主催もご協力いただけてます岩手連携復興センターなんかにはちょっと一声かけて、どっかいませんか？こういう人とかっていう風に言していただくと、コモンズなんかどちらかというとその役割をしてるので、割りと知り合いが日頃から多いと。コモンズも知らないものは人を通してということで、やる。

大野

そうです、おっしゃる通りです。

田尻

是非ぜひ自分で考えずに声を掛けていただいたいという風に思います。だいぶ時間がきましたけども、先ほど大野さん言われてた、円卓会議って僕いい名前だと思ってるんですね。マルチステークホルダー・プロセスって言いましたけど、これ言いにくいし、ちょっとピンとこない。円卓会議の良さっていうのは、大野さんが色々とお話を、事例の中でいただきましたけども、例えば行政の皆さん、行政のよくやる住民説明会みたいなところで、どうして批判が出たり、対立が起こるか。どうしてだと思えますか？

対面に向かって座るからです。エネルギーが前と前にしかいかないんですよ。拡散しないから、すぐにパーンって言われて、それに対してこうやる。円卓というのは、大野さんの写真に出てきましたけど、本当に円になって座るんですよ。そうすると力が、真正面の人とか斜めとか、こういう拡散するんです、皆が。そうするとクロスして、その雰囲気だけでかなり柔らかくなる。そういう意味では、一方的な対面、色んなものでもそうですし、このプロセスの話だけじゃなくても、ちょっとギスギスするなというような住民の話し合いなんかでも、ちょっと車座になってみるとかっていうようなことをされると、大分エネルギーが逃げて、和やかに議論できる。円卓会議はまさに、それぞれの立場の違う人が集まるからこそ、ちょっと力が抜けるように丸くする、まさに円卓にするというところが、ポイントかなという風に思いました。

はい、大野さん、ありがとうございました。東さん、大野さん、色々の具体的な事例、非常にわかりやすい、ちょっと大野さんのところは早く進んでいるので、ちょっと難しいなっていう風に思う部分があるかもしれませんが、東さんのところでやられているものを聞かれたら、多分これならやれるかなというように思われたかと思います。その一步一步は先ほどもお話ししましたように、100%完成度の高いものというのは初めから狙わずに、段階を踏みながら、していく。初めは3人で始まって、やはり3人より4人で今度は企業の人入ってもらおうとか、だんだん膨らんで行くような、円卓会議のやり方もあるかと思えますので、是非色々な実験を地域でやっていただいたらと思います。私の話が不十分でしたので、今日これも先ほど言った国の円卓会議の中で作った、円卓会議のすすめというものです。これなんかも、ご参考にいただいたらいいなという風に思います。

そして、円卓会議もマルチステークホルダー・プロセスもそうですし、協働もこれからどんどんどちらかじゃないですよ。二者の協働もまだまだやっていけないといけない。多数でやる協働もやっていけないといけない。是非、いい事例をお持ちの方は、今日チラシの中にこういう、そういういい協働を広めて行こうということで、パートナーシップ大賞というのを日本NPOセンターもかかわって、やらせていただいていますので、うちの事例なんかどうかなって思えば、こういうのに応募していただくと、賞がもらえると今度それが売りになって、一緒にやりませんかとかっていう話につながっていくという風に思いますので、活用いただければという風に思います。東さん、大野さん、ありがとうございました。皆さんもどうもありがとうございました。(拍手)

テーマ3 ワークショップ -課題を把握して資源を見極めるプロセスの実践-

尾上

最初の前半の2つのセッションの話を基に、色々な田尻さんのお話とか事例を聞いていただきました。それを基に、皆さんが具体的に活動に何かつながるヒントを是非お持ち帰りいただければという風に思います。それは具体的に始めるような

ものでもあるし、あるかもしれないし、最初の小さな一歩もしれません。そんなヒントをお持ち帰りいただきたいというのは、このワークショップのゴールです。ちょっとルールとして、お約束いただけないかなということが3つほどあります。1つは皆さん組織の代表としてもいっちゃってるんですけど、組織の代表だけではなかなか進まないこともありますんで、組織も代表しながら、ご自分の考え、個人の持つ強みも是非出していただいて、お話いただければなという風に思います。組織と個人の強みを生かそうという風に一番に書きました。

もう1つは、出来るだけこういう場ですので、つながる工夫をしていただいて、こんな資源がここにあったんだと、いうようなことを今日この場だけじゃなくて、今後にも生かせるような形につなげていただければいいなという風に思います。3番目、話の持ち出しによっては、ちょっとセンシティブな話題もあるかもしれません。人の名前が具体的に出来る可能性もありますので、ちょっと話をこの会場の外に持ち出す時は是非色々ご配慮いただいて、しこりを残さないような安心、安全な場になるように、是非ご協力いただきたいという風に、守秘義務というか、その辺についてご配慮いただければという風に思います。この3つが是非今日、この今から約1時間ちょっとでお願いしたいことです。是非、全員参加で、いい場を作っていこうという風に思っていますので、よろしくをお願いします。

今日の主役はもちろん皆さんであります。私どもはちょっとお手伝いをするだけです。今日これからの進め方になんですけど、4時55分まで、あと1時間半ぐらいですね、進めたいと思います。テーマに分かれて話をさせていただくと。具体的な進め方はこれから申し上げますけど、そんな感じで最初自己紹介やって、2つぐらいお話をさせていただいて、その成果を他のグループの状況も見ていただく。そして最後にもう1回共有する。そんなような進め方です。それでは最初に入りたいと思います。まず各グループで、初めての方もいっちゃるという風に思いますので、自己紹介をしていただくと思います。自己紹介のためにA4の白い紙を各自1枚お取り下さい。半分にさせていただいて、上のほうにお名前、下のほうにテーマそれぞれ話題を選びましたね。例えばコミュニティ形成を選んだ方は、コミュニティ形成に関して今気になっていることとかご自分のところで困ってること、選んだテーマに関して今気になってることとか困ってることを、A4の紙に1人1枚ずつお取りいただいて、プロッキーという少し太いサインペンのようなものがあると思います。それを使ってお名前、所属、そして下のほうにテーマに関することで今気になってること、困ってることをちょっとご記入いただけますでしょうか。記入をいただいてから順番にグループ内で紹介をするということにします。記入の時間は2分半ほど差し上げますんで、2分30秒でちょっと書いてみてくださいいただけますでしょうか。大丈夫ですか。お願いします。

(記入の時間)

だいたいご記入いただけましたでしょうか。それでは各グループ内で自己紹介をしていただくと思います。今お書きになったものを、基本的に読み上げる形で結構ですので、1人1分もかからないかもしれませんね。どなたか、最初の方を決めていただいたら、あと時計回りにいきましょうかね、右回りにいきましょう。最初の方、ボランティアでちょっと手を挙げていただいて、紙を見せたりしながら読み上げていただく形で一回りしましょう。時間は全部で5分くらい差し上げますから、1人1分以内くらいで、3、40秒で進めて下さい。どなたからスタートするかお任せします。どうぞ。

(自己紹介)

はい、どうもありがとうございました。それでは自己紹介で、どういう方がいっちゃってるかがわかったというところで、話をさせていただくと思います。では最初の話です。これから約20分くらいかけてお話しいただくと思います。今日、色々なお話をお聞きになりました。今日話を聞いたことを、ご自分の組織でもし使うとしたら、それはどんな場面でしょうか。今日

聞いたマルチステークホルダー・プロセスのことをもし自分の組織で使うとしたら、それはどんな場面でしょうか。そんな問いです。よろしいでしょうか。

まず、問いはわかりましたか。はい、ありがとうございます。今日、聞いたこと、学んだことを、もしご自分の組織で使うとしたらそれはどんな場面でしょうか。どういうところに使えるでしょうか、ということをお考えいただこうと思います。まずちょっと、30秒ほど時間差し上げますので、お一人ずつでちょっと考えてみて下さい。今からちょっと、沈黙の30秒とります。よろしいですか。

(30秒沈黙)

はい、どうもありがとうございます。

それではグループの中で、お話を下さい。今日学んだことをご自分の組織で使うとしたら、それはどんな場面でしょうかということで、ご自由にお話し下さい。ファシリテーターの方、よろしく。

(ワーク)

はい、時間です。お疲れさまでした。ありがとうございます。そこで一旦ちょっと、お話を置いていただけますでしょうか。はい、大丈夫でしょうか。どうもありがとうございました。ちょっと皆さんのテーブルの上に、お名前とそれからその気になることの紙があると思いますけど、この紙をちょっと半分に折っていただいて、名前のほうが裏になるようにして、気になること、困っていることが上になるようにして、紙を半分に折っていただいてテーブルの上に、段ボールの上にもう1回置いていただけますか。そうすると書くスペースが少し出来ますし、よりテーマがはっきりするかなという風に思います。大丈夫でしょうか。ではこれから2番目の対話に移りたいと思います。2番目のテーマは、実際にそういう風にご自分のところで円卓会議をやってみようとする、実際誰に声を掛けるのかというようなことはとても大事だと。どんな風な順番で、誰に声を掛けるのかということは重要だという話がさつき出たと思います。そう意味で、実際に円卓会議をやるとした時に、声を掛けるステークホルダーの人たちって、自分の場合だとどんな人たちがいるんだろうかなということをちょっと考えて出していただこうという風に思います。もう今すでに、最初の話で出たグループもあるかもしれませんが。ただここで、色んな人が、色んな気づきがあれば、あ、それは自分のところで忘れていた、どうやって声を掛けるの？そんな話が出るとういかなと思っています。よろしいでしょうか。そうですね、なるべく具体的にどこの誰みたいなどで、ちょっと考えていただきましょうか。時間は15分ほど続きで、このまま話を続けて下さい。どんなステークホルダーに声を掛けますか、ということで15分です。よろしく願います。

(ワーク)

はい、ありがとうございます。では時間が来たようですので、一旦ここで話を終えていただけますでしょうか。今、2つの話をさせていただきました。まず、これを使うとしたらどんな場面かなということと、その時関係するようなステークホルダーの人たちってどういう人たちかなという話をさせていただきました。グループのよっては、ちょっと思いもつかなかったステークホルダー、ああそういう人たち、確かに知識も色んな情報あるよねという話が出たところもあるようでした。お疲れさまでした。ありがとうございます。次のところでは、今2つの話し合いを通じて、今度ご自分の組織で実際にやるとしたら、どんなことが出来るかなという自分の組織でやってみたい円卓会議のアイデアを書いていただこうかなと思います。今度はちょっと大き

めのポストイットが各グループに今からお配りしますので、1人1枚紙をお取りいただいて、ご自分の組織でやってみたい円卓会議のアイデア、今2つの話し合いを経て、やってみたい円卓会議のアイデアをちょっと書いてみていただけますでしょうか。自分の組織ですね。私の組織でやってみたい円卓会議のアイデア、例えばこれならやれそうとか、やってみたいとか、やってみるとしてもここからスタートかなということでも結構です。よろしいでしょうか。このポストイットにプロッキーで見える色で使っていただいてご記入ください。時間は4分間差し上げますので、ちょっと考えて、各自で書いて下さい。グループで合意する必要ありません。ご自分の個人ワークです。4分間、よろしいでしょうか。お願いします。書いていただいたものは、他のグループも含めてちょっとこれから見ていただく時間を設けますので、他の方にも見えるような色、大きさをちょっとご記入ください。時間ですけども、まだ書いてる方いらっしゃるんで、あと1分だけ延長しますんで、あと1分でお願いします。

時間ですけど、もうちょっと欲しい方いらっしゃいますか。はい、どうもありがとうございます。では今どんなことを書いたのかを、グループの中で他の方はまだご存じないので、グループ内でちょっと1人ずつ読み上げる形で、グループ内の紹介をしていただこうと思います。読み上げるだけですので、1人30秒くらいかな、ということで、書いたものを読むということで結構です。順番はお任せしますので、どなたからかスタートして、時計回りなら時計回りで進めましょう。7人のグループいらっしゃるんで、4分ぐらいとっておきますから、1人30秒ぐらいで進めてみて下さい。それではお願いします、どうぞ。

(グループ内での共有)

はい、お疲れさまでした。どうもありがとうございました。グループ内で紹介が終わりました。これからよそのグループでどんなアイデアが出たのかを、是非見に行こうと思います。皆さんのテーブルの段ボールの板は足がありません。自立出来ないんですね。皆さんが外れると倒れてしまわないように、ちょっと立っていただいて、椅子の座席のところにこの円盤をちゃんと乗せていただいて、固定していただけますでしょうか。椅子で囲うような形で。ありがとうございます。プロッキーをしまっていたグループもあります。

それでは大丈夫でしょうか。その状態で他のグループのを見に行きます。なので、皆さんの書いた付箋紙は見えるようにしておいて下さい。隠れないようにしておいていただけますでしょうか。ご自分のプロフィールで書いた、今気になってることも併せてそばに置いておいていただくと、こういう方がこういうプロセスをやろうとしてるんだなということがわかります。

どこのグループを見に行くかは皆さんにお任せいたします。多分、自分のテーマに近い所を先に見ていただいて、他に気になる所があれば行っていただこうと思います。

そうですね、7分間の間自由に見ていただいて、また7分後にご自分のところにお戻り下さい。これから回遊方式で覗き見タイムですね。それではスタートします、どうぞ。

(会場を周回して他のグループの内容を見る)

はい、時間がきました。お疲れさまでした。それではご自分のテーブル、よそのグループに色んなリソースといますか、新たなアイデアもあったかもしれません。今日は、午後1時から開始しまして、冒頭で理解を深めるということで、田尻さんにマルチステークホルダー・プロセスとは何かという解説をしていただきました。第2部のほうで、事例を知るということで、2

人の、東さんと大野さんに事例のご紹介をいただきました。今、ワークショップで、ご自分のところについて3つの地域課題について、考えていただいたわけです。今日を通して、ご自分のグループの中で、それぞれの感想を共有する時間を持ちたいと思います。時間は今から、8分ぐらい差し上げますので、自由に今日やってみて聞いて、どうだったかということ、感想をグループ内で共有してみてください。よろしいでしょうか。では自由をお願いします、8分間です、どうぞ。

(感想など共有)

はい、お疲れさまでした。どうもありがとうございます。ここで一旦グループでの話を終了して下さい。何か随分、笑い声が起こってたそっちの見守り体制の構築グループですかね。なんかどんな話が出たか、ちょっと気になるんですけど、ちょっとこんな意見、自分の意見でもグループの意見でもいいんですけど、共有してみたいことありますか、何か。

参加者(女性)

はい、見守りグループです。今日皆さんでこういう風にお話をして、色んな気づきがあったりですとか、自分の活動に戻られて色々思うこととかつなげていきたいなっていうようなことがあったりしました。あと、最後に出てたのが、学生さんたち、若い世代ともつなげてやっていけたらいいなというお話が出てて、しっかりつかまえて帰ろうという話で盛り上がりました。こんな感じでいいですか。

尾上

はい、どうもありがとうございました。せっかくなんであと2つグループあるので、1つずつぐらい、テーマごとに出して、2番のほうのスズキさんのとこで、どうぞお願いします。

参加者(男性)

ありがとうございました、また次になんかこういう風な話し合い重ねたいねっていう感想と、やっぱりこっちも子どもをつかまえていこうという…僕が言うと変なんでやめておきます。

尾上

はい、ありがとうございました。ではこちらコミュニティ形成でどちらか、ちょっと共有してみてもいいよという方、いませんか。

参加者(男性)

まず、この「えんたくん」という丸いテーブルがすごくいいね、という話が沢山上がりました。ただ、マルチステークホルダー・プロセスについては、カタカナばかりでよくわからないねという話から始まって、もっと普通に円卓会議とかでもいいんじゃないのみたいな話も出ていました。ここでは外から来る支援をしようと思っている方々と、現場で結構動いている現場の方々と2つに分かれていて、それぞれに外から来る人たちはどうやって人を集めたらいいんだろうかという、集めたいんだけどなかなか集められなくてどういう人たちを呼び込んで必要性を訴えていけばいいのかというようなことを話していて、そこが難しいよねというところで終わってますけど、現場のほうではコミュニティづくりを現場でするにあたって、色んな人を巻き込んでいきたいけれども、プロデューサーの力というのはすごく重要だよねという話をしていました。信用されていなきゃいけないし、中立な立場じゃなきゃいけない、そういう人を本当に現場で見つけていく、育てていくというのは大変なんだなという話

をしておりました。

尾上

はい、どうもありがとうございました。大丈夫ですか、はい。ありがとうございました。多分もしかしたら、グループの中で今日の登壇された方に、田尻さん、あるいは東さん、大野さんとかにお聞きになりたい方は多分いらっしゃると思います。一応、懇親会の場も用意されていますので、その場でも聞けると思います。是非この場で聞いてみたいという方いらっしゃれば、1つ2つは頑張っけて受けて、答えていただこうと思いますが、いらっしゃいますか。あるいは、他のグループにちょっと聞いてみたいんだという方でもいいです。さっき、ぐるぐる回ってみて、ちょっと気になったということでも結構ですが、登壇者、あるいは他のグループに聞いてみたい、質問してみたいという方いらっしゃれば、ないようでしたら、もっと個人的に聞きたい、是非聞いてみたいことは、こちらでご案内になってる通り、懇親会の場で立食でやるそうですので、その人のところにじり寄り行って話し下さい。

一応では、テーマ3のワークショップはこれで終了したいと思います。どうもお疲れさまでした、ありがとうございます。

(拍手)

閉会

閉会あいさつ

田尻

47団体84名の方にご参加いただいているようでございます。喋ってますけどまだ名刺交換が続いているぐらい盛り上がったということで、是非2つお願いをして終わりたいなと思うんですけど、1つは今日一緒に議論をいただいた皆さん、せっかくの関係ですからどこかで何かの協力出来る関係に是非つながっていただければいいなというのが1つ、2つめは、それほど、私の説明が下手だったので難しく聞こえたかもしれませんが、今日やっていただいた1時間、2時間でも、全く初めて出会った人とでも議論が出来る。これの積み重ねとそのメンバーの多様性が、円卓会議であったり、マルチステークホルダー・プロセスの大元だということに気づいて頂ければ、これからやっぱり急いで何かをやらないうけない時期は、だいぶ終わりつつあるかなと。緊急性があれば別ですけども。

そういう意味で言うと、じっくり考えながらじっくり進めていくという意味では、こういう手法を是非とりいれて、進めていただければいいなという風に思いますんで、よろしく願います。そのためには中間支援と言われているいわて連携復興センター、そして遠いんですけど日本NPOセンター等々、そういったところをうまく活用いただいて、やっていただければいいなという風に思いますんで、引き続き復興に、一緒に頑張っていければなという風に思います。

1日お忙しい中、ご参加いただきましてありがとうございます。最後に皆さん、参加者全員に拍手ということで、閉めたいと思います。どうもお疲れさまでした。

(拍手)

以上